



O S A M U

K I D O

————— 木戸修



木戸 修 | OSAMU KIDO

1976年 東京藝術大学大学院美術研究科彫刻専攻を修了
1986年 東京藝術大学美術学部彫刻科専任講師となる
1992年 文部省在外研究員としてイタリアに滞在
1994年 東京藝術大学美術学部助教授となる
2005年 東京藝術大学美術学部教授となる(2018年3月退任)

| パブリックコレクション |

三菱重工業本社(千代田区・東京)/甲府地方務局(甲府市・山梨)/美ヶ原高原美術館/宇部市野外美術館//石川県立美術館/板橋区立美術館/「MOON」吉川市月の公園(埼玉県・吉川市)/「スパイラルエッグ」安田不動産ビル(東京・神田)/「SPIRAL Kan」石川県立音楽堂(石川県・金沢)/「スパイラルリング G」群馬県警察(群馬県・高崎・/「SWIM」横浜国際水泳場(神奈川県・横浜)/「SPIRAL TRAIN」JR東日本本社ビル(東京都・新宿)/「繭の螺旋」桐生市文化会館(群馬県・桐生)/「スパイラル」国分市役所(鹿児島県・国分市)/「スパイラル」八王子HPビル(東京都・八王子市)/「スパイラルリング」大田区文化センター(東京都・大田区)/「飛翔」基町クレド(広島県・広島市)/「スパイラルリング」稲城市体育館(東京都・稲城市)/「スパイラルボール」コマ劇場跡(大阪府)/「スパイラルリング #4」シーガイア国際会議場(宮城県)/「スパイラルリング」吉田ビル(神奈川県・新横浜)/「ダブルオー」王子製紙ホール(東京都・銀座)/「揺れる螺旋」石神井川緑道(東京都)/「スパイラルリング」葦崎市安田火災研修センター(山梨県)/「スパイラル H」平塚総合運動場(神奈川県)/「スパイラル」佃島小学校(東京都)

| 個展 |

2020 日本橋高島屋(東京)
2018 東京藝術大学退任展(東京)
Red Gold Fine Art(台北・台湾)
2013 いりや画廊(東京)
2006 日本橋高島屋(東京)
2004 色彩美術館(東京)
2002 アトリエ展(浅科・長野)
1995 ART BOX(横浜)
1994 ギャラリーせいほう(東京)
1980 コージースペース(東京)
1979 コージースペース(東京)
ギャラリー・ルコアン(大阪)

| 受賞歴 |

2016 東北芸術祭(大子町・茨城)
2015 彫刻7人展「空」(17、19、天王洲アートホール)
2013 いりや画廊個展(東京)
2012 立体造形の真髄展(日本橋高島屋・東京)
2009 日本ギリシャ修好110周年展(メガロムシキス・アテネ・ギリシャ)
2006 日本橋高島屋(東京)
2005 ネオメタル展(ギャラリーせいほう・東京)
日韓展(ソウル・東京)
2004 色彩美術館(東京)
第4回七人七曜展 - 金属作家による - (ギャラリー和田・東京)
KINZOKU展(天王洲アートホール・東京)
2001 芸術と科学展(清華大学・北京)
1995 街と彫刻展(那覇)
1992 風・彫刻展(墨田区立ギャラリー・東京)
1991 木戸修 深井隆 二人展(板橋区美術館)
タピスリーと彫刻展(東京)
1990 丸ノ内野外彫刻展(東京)
1990 板橋の現況展(板橋区立美術館)
1989 東京野外現代彫刻展(世田谷)
1988 安田火災百周年記念彫刻公募 大賞受賞(葦崎市)
現代彫刻展イン穂高(長野)
現代彫刻展(信濃美術館)
1987 東京芸術大学創立百周年記念展(有楽町アートフォーラム)

1986 東京野外現代彫刻展 優秀賞受賞(世田谷)
石川県作家選抜美術展(石川県立美術館)
日本金属造形作家ドイツ合同展(金沢・札幌・山形・鎌倉)
1985 現代日本彫刻展(宇部市)
1984 たのしいオブジェ展(コージースペース・東京)
現代彫刻の展開展(ギャラリーせいほう・東京)
1983 ヘンリームア大賞展 優秀賞受賞(美ヶ原高原美術館)
現代日本彫刻展 宇部市野外美術館賞受賞(宇部市)
たまがわ野外彫刻展(東京)
エンバ美術賞展(東京・兵庫)
1981 現代日本美術展(東京都美術館)
現代日本彫刻展(宇部市)
千葉県新進作家展(船橋西武美術館)
レリーフ5人展(コージースペース・東京)
1980 歩会展(千葉県立美術館)
日本金属造形作家ドイツ巡回展(ハンブルグ他)
1979 二科賞受賞
金沢彫刻展 - 零から無限へ - (金沢市)
1978 第1回日本金属造形作家展(銀座和光ホール: 2/3/4/6/11回展にも出品)
1976 東京芸術大学大学院修了制作にてサロンドプランタン賞受賞
金属彫刻4人展(横浜県民ホール)
1975 ジャパンアートフェスティバル(東京・シドニー)
二科展にて特選受賞(91年まで出品)
彫刻36人展(ミノリ工芸サロン・東京)

木戸修の彫刻 - 空間と時間のあわい

鈴木 杜幾子

旅客機以外で空を飛んだ経験はないが、佐久平にある木戸氏のアトリエに伺うたびに、グライダーで小旅行をしたような気持ちになる。大きく三段に分かれている広大な敷地に、ポンペイアン・レッドの壁を持つアトリエが建ち、背丈の二倍はあろうかというものから両腕に抱けるようなものまで、螺旋形のさまざまなヴァリエーションであるステンレスの彫刻が、心地よい間隔を保って置かれている。刻々と変化する空、広がる畑地と林、かすむ山々は、無造作と緻密な美意識が作り上げているこの小世界の背景として存在するようだ。氏の作品の複製写真にいたずら描きをしたことがある。〈スパイラル・リング #5〉(1994)の正面からの写真である。台座からステンレスの曲線に沿ってペンを走らせてみた。ペンとともに上昇し下降する視線は、映り込んでいる空や雲や木々によって攪乱され、彫刻の各部分はお互いを知らないと言いたげに、台座に接する最下部を除いては触れあうことはない。だが、ペンを持つ指先が納得するにつれて全体が一つの流れに見え始め、優しい旋律を奏で始める。写真ではなく実物では、その柔らかな動きも実体化する。一見硬質な金属と思える作品が、周囲の小さな振動によって微かに揺れ、空や樹木や見ている人の姿の反映とあいまって、変幻自在極まりない一つの現象となる。〈SPIRAL.UD〉、〈SPIRAL.DRA〉、〈SPIRAL.S-BARA〉・・・螺旋は木戸氏が半生をかけて展開している彫刻的命題だ。出発点となる三角形や四角形をそのまま上に伸ばせば三角柱や四角柱になるのは私にもわかるが、想定された面や空間にそれを合わせつつ、ねじれを加えて（つまり螺旋を描きながら）完成形にしてゆくには、当然難しい計算が必要になる。氏が作る紙のマケットに書き込まれた目盛や数値が、その整然たる過程を示している。だがアトリエの中にある氏自身が製作した電動や手動の機械には、厚さ2.5ミリのステンレス板を何ヶ月もかけてかたちにする氏の両手のぬくもりが感じられる。切断する、ねじる、溶接する、研磨する手の延長の道具たち。

たいていは「スパイラル・・・」で始まる作品のタイトルも、時にユーモラスで温かい。手首を突っ込んで向こう側の人と握手できそうな穴の空いた作品は、<Spiral Holes>ではなくて<Spiral Ana>と呼ばれる。氏の命名は揺らぎや映り込む外界と協働して、作品を金属彫刻にありがちなモダニズムの一回性から解き放つ。作品は人と同じ空間と時間に生き、呼吸する存在に変貌する。美術史家というものは、実際の制作に関しては素人と変わらない。そのことは必ずしも悪いことではないというのが私の持論でもあるが、今回実に驚いたことがある。彫刻というものは空間の一部を占めている。そして地面に置かれた塊である立方体やピラミッドででもない限り、必ず空間を内包もしている。木戸氏の彫刻の美しさが、交わることのない部分のあいだの空間によるものであることには気づいていたが、今回伺った説明によれば、氏はステンレス部分のかたちではなく、あいだの空間から発想するのだという。三角形の断面をもつステンレスの彫刻体が形づくる空間は六角形をしているが、最初に制作するのは三角ではなく六角形のチューブとのこと。完成作では文字通り空となるチューブを作るための原型（金属の輪に断面の形の板を通したもの）を見せて下さった。作品に内包される眼に見えない六角形をなぞろうとする氏の指の動きと言葉は、美しい謎のように心に残った。木戸氏の作品が建築の前に設置されている情景写真を見ていただきたい。むろん現地に赴くことができればなおよい。巨大な建築に相対的に小さな彫刻が拮抗していることが感じられるであろう。彫刻に結実している自然に介入する木戸氏の意志が、人のスケールの何層倍もの近代建築と並び立っている。































